

現代日本語の動詞「詰める」「覆う」の分析 —格体制の交替の観点から—

An Analysis of Japanese Verbs *Tsumeru* and *Oou* : The Possibility of Allowing the Locative Alternation

川野靖子*

KAWANO Yasuko

1. はじめに

次の(1)が示すように、「満たす」という動詞は、格体制の交替（～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形の交替）を起こす。「塗る」を述語とする(2)でも同じ現象が観察できる。このような～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形の交替現象は、「壁塗り代換」と呼ばれている。

- (1)a. グラスに水を満たす（～ニ～ヲ）
- b. グラスを水で満たす（～ヲ～デ）
- (2)a. 壁にペンキを塗る（～ニ～ヲ）
- b. 壁をペンキで塗る（～ヲ～デ）

一方で、このような交替を起こさない動詞もある。たとえば次の(3)が示すように、「入れる」は～ニ～ヲ形しかとらない。

- (3)a. バケツに石を入れる（～ニ～ヲ）
- b. *バケツを石で入れる（～ヲ～デ）

また、次の「ふくらます」のように、～ヲ～デ形しかとらない動詞もある。

* かわの・やすこ
埼玉大学教養学部准教授、日本語学

- (4)a. 風船を空気でふくらます（～ヲ～デ）
- b. *風船に空気をふくらます（～ニ～ヲ）

川野(2009)では、「満たす」や「塗る」のような、格体制の交替を起こす動詞（以下、交替動詞と呼ぶ）と、「入れる」や「ふくらます」のような、交替を起こさない動詞（以下、非交替動詞と呼ぶ）の違いを分析し、交替動詞の条件を記述した。

本稿では、川野(2009)では詳しく扱わなかった「詰める」と「覆う」を取り上げ、これらの動詞についても川野(2009)の記述に沿った説明が可能であることを示す。

本稿で取り上げる「詰める」と「覆う」は、典型的な交替動詞にも典型的な非交替動詞にも分類しにくい動詞である。まず以下の(5)に「詰める」の例文を示す。

- (5)a. 袋に小石を詰める（～ニ～ヲ）
- b. ?袋を小石で詰める（～ヲ～デ）^{注1}

～ニ～ヲ形の(5a)は問題なく許容されると思われるが、～ヲ～デ形の(5b)の許容度は、人によって分かれるようである。3.2.で述べるように、先行研究の見解も分かれており、本稿が行

った用例調査の結果を見ても、「詰める」の～ヲ～デ形の実例は皆無ではないものの非常に少ないという状況になっている。

続いて以下の(6)に「覆う」の例文を示す。

- (6)a. 自転車をシートで覆う (～ヲ～デ)
b. ?自転車でシートを覆う (～ニ～ヲ)

「詰める」の場合とは逆に～ヲ～デ形の(6a)は問題なく許容されると思われるが、～ニ～ヲ形の(6b)の許容度は、人によって分かれるようである。

このように「詰める」と「覆う」は、非交替動詞であるとは言い切れないものの、「満たす」や「塗る」等ほど安定して交替が許容されるわけではない。そこで本稿では、その背景を考察し、「詰める」や「覆う」において交替が難しくなる理由を明らかにする^{注2}。典型的な交替動詞にも典型的な非交替動詞にも分類しにくい「詰める」と「覆う」であるが、これらの動詞において許容度が揺れる理由も、川野(2009)で示した枠組みによって説明できると考えている。

以下ではまず次の2節において、壁塗り代換の～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形が意味的にどのような関係にあるのかを述べた後、3節で「詰める」を分析し、4節で「覆う」を分析する。なお「詰める」と「覆う」で節を分けるのは、交替の成立を難しくしている要因が、それぞれ異なると考えられるからである。最後に5節で考察をまとめる。

2. ～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形の関係

壁塗り代換の～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形は一見同義に見えるが、厳密にはそうではなく、前者は位置変化を表し、後者は状態変化を表すことが、奥田(1968)(1976)、奥津(1981)等の先行研

究によって指摘されている^{注3}。(1)を例にとると、(1a)の「グラスに水を満たす」は、水をグラス以外の場所からグラスの中へ移すこと(すなわち水の位置変化)を表し、一方(1b)の「グラスを水で満たす」は、グラスの様子を変化させること(すなわちグラスの状態変化)を表すということである。

このような考え方がなされるのは、同じ格体制をとる動詞は同じ範疇の意味を有するという理解があるからである。「バケツに石を入れる」「机の上に本を置く」「壁にペンキを付ける」など、～ニ～ヲという格体制をとる動詞は位置変化を表す。これらと同じく「グラスに水を満たす」も～ニ～ヲという格体制をとっているため、この場合の「満たす」は位置変化を表すと考えられるのである。また、「風船を空気でふくらます」「穴をセメントでふさぐ」「海水を水で薄める」など、～ヲ～デという格体制をとる動詞は状態変化を表す。そして「グラスを水で満たす」も～ヲ～デという格体制をとっているため、この場合の「満たす」は状態変化を表すと考えられるのである。本稿も先行研究に従い、～ニ～ヲ形は位置変化を表し、～ヲ～デ形は状態変化を表すと考える。

3. 「詰める」の分析

2節で述べたことを踏まえると、位置変化を表す動詞(～ニ～ヲ形をとる動詞)の中にも、「満たす」のように～ヲ～デ形との交替を起こす動詞もあれば、「入れる」のように～ヲ～デ形との交替を起こさない動詞もあるということになる。このことは、一口に「位置変化」といってもタイプがあり、そのタイプによって交替の可否(～ヲ～デ形との交替を起こすか否か)が決まるということを示している。また「詰める」において交替が難しくなる(「満たす」等に比べ

ると～ヲ～デ形が許容されにくくなる)理由も、「詰める」が表す位置変化の特徴に求められることになる。

そこで本節では、「詰める」が表す位置変化を、典型的な交替動詞が表す位置変化や典型的な非交替動詞が表す位置変化と比較し、その特徴を明らかにする。そしてそこから、「詰める」において交替が難しくなる理由を考察する。

3. 1. 典型的な交替動詞が表す位置変化

前述のように、位置変化を表す動詞（～ニ～ヲ形をとる動詞）の中にも「満たす」のように～ヲ～デ形との交替を起こす動詞もあれば、「入れる」のように～ヲ～デ形との交替を起こさない動詞もある。川野(2009)では、両者の表す位置変化の内容に違いがあることを指摘し、交替動詞の表す位置変化が「依存的転位」であるのに対し、非交替動詞の表す位置変化は「非依存的転位」であると論じた。「依存的転位」とは、「対象が他の事物に依存的なあり方でそこに位置づけられる」というタイプの位置変化であり、「非依存的転位」は、対象の位置づけられ方が他の事物から制限されないタイプの位置変化である。「依存的転位」には「形状適応」と「外観構成」の二つがあるが、ここでは「詰める」の分析に関わる、形状適応について詳しく説明する。交替動詞には「満たす」「塗る」「巻く」等があるが^{注4}、これらの動詞は「対象を場所の形状に適応させながらそこに位置づける」という内容の位置変化（形状適応）を表す。たとえば「AにBを満たす」と言った場合、Aに満たされたBは、Aの形と同じ形状でAの中に存在することになり、Aの形状次第でAの中にあるBの形状が決まる。

これら「満たす」「塗る」「巻く」等の動詞が形状適応を表すことは、次のことから確認できる。まずこれらの動詞は、「AニBヲ+動詞」

のBの部分に、水やペンキ等の液体や、布等の薄くて柔らかい物を指す名詞をとりやすい。また、それ以外の固体（たとえば石など）を指す名詞をとる場合には、次の(7)が示すように、複数の固体の集合として解釈され、一個の固体という解釈は成立しにくい。このことは、これらの交替動詞が形状適応を表すことを示している。

- (7) a. バケツに石を満たす(複数の石の集合)
b. ??バケツに大きな石を一つ満たす
cf. バケツに大きな石を一つ入れる

これに対し、「入れる」「付ける」「置く」といった、非交替動詞が表す位置変化には、このような形状適応という指定がなく、位置づけられる対象の形状は場所の形状から制限されない。このことは、上記(7)の参照例にある「バケツに大きな石を一つ入れる」のような、「石がバケツに合わせて形状適応する」という状況が読み込みにくい文が十分に成立することからも分かる。

3. 2. 「詰める」に関する現象の確認

「詰める」は「満たす」と似た意味を表すように見える。しかし1節でも述べたように、「満たす」が交替動詞としてほとんどの壁塗り代換研究で言及されているのに対し、「詰める」の場合は研究者によって見解が分かれている。奥津(1981)では、自動詞「詰まる」を交替動詞として挙げているが（パイプにゴミがつまる／パイプがゴミでつまる）、他動詞「詰める」は挙げられていない（なお「満ちる・満たす」は共に交替動詞とされている^{注5}）。一方、岸本(2001)(2011)は、「詰める」も交替を起こすとして次のような例を挙げている。

- (8) a. 彼は、(スーツケースに) シャツを目一杯詰めたよ。

b. 彼は、(シャツで) スーツケースを目一杯詰めたよ。(岸本 2011, p.42(18))

また Iwata (2008) は、「箱に苺を詰める／箱を苺で詰める」という例を挙げ、許容度の判定は必ずしもはっきりとは決まらなると断った上で、～ヲ～デ形の「箱を苺で詰める」も許容されるという見解を示している^{注6}。なお「満たす」に関しては、奥津(1981)と同様、岸本(2001)や Iwata (2008) でも交替動詞とされている。

次に、本稿が行った用例調査の結果からは、「～ヲ～デ詰める」の使用は皆無ではないものの非常に少ないという状況が観察された。国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下 BCCWJ) から、『中納言』を使用して「詰める」の用例を採集し、無作為に抽出した 500 例について～ニ～ヲ形あるいは～ヲ～デ形と判断できる例を数えたところ、～ニ～ヲ形 198 例に対し、～ヲ～デ形は 3 例に留まった(うち 1 例は翻訳書からの用例である)^{注7}。～ヲ～デ形の 3 例を以下に示す(下線は川野が施した。なお以降の例文の下線も同様である)^{注8}。

(9) 夫人が何も言い返さないうちに、岩づらが茶色い旅行かばんを指さした。「これを詰めたのも、あなたですか?」「子どもたちですわ」とバンコーレ夫人。

(ビヴァリー・ナイドゥー著、もりうちすみこ訳『真実の裏側』2002年)

(10) 歯の治療には、むし歯で欠けた部分を詰めたり、かぶせたりする歯冠修復や、なくなった歯を人工歯で補い元どおりにする欠損補綴(入れ歯)とがあります。

(木村辰男『家庭の医学』2005年)

(11) また、じゃがいもをゆでたのを裏ごしましたが、これも細かいつぶつぶがあり、味見をすると口の中に残ります。飲ませ

てのどをつめるということはないでしょうか?^{注9} (Yahoo!知恵袋、2005年)

ちなみに「満たす」についても同じ条件で調査したところ、～ニ～ヲ形が 19 例、～ヲ～デ形が 19 例であり、こちらは～ニ～ヲ形、～ヲ～デ形ともに一定の使用数が得られた(なお、抽出した 500 例のうち、～ニ～ヲ形、～ヲ～デ形以外の「満たす」の例は、「要件を満たす」「基準を満たす」「ニーズを満たす」などの「～を満足させる」という意味の「満たす」や、「なんともいえない酸っぱさが鼻腔を満たす(馳星周『週刊ポスト』2005年)」のような～ガ～ヲ形の例等である)^{注10}。

3.3. 考察

以上のように、先行研究の記述や用例調査の結果を総合すると、「～ヲ～デ詰める」は完全に非文とは言えないものの、「～ヲ～デ満たす」等ほど安定して許容されるわけではないようである。以下ではこの理由を考察する。

「詰める」の意味を詳しく記述したものに、森田(1989)がある。森田(1989, p.743-744)は、「箱にみかんを詰める」「タンクにオイルを詰める」のような例を挙げ、「詰める」は「容器に物が隙間なく納まる」ことを表すと述べている。確かに「箱にみかんを詰める」と言った場合、大きな箱の中に小さなみかんが一つだけ入っているという状況は想像し難く、箱一杯にみかんが入っているという解釈になる。この点で「～ニ～ヲ詰める」は「～ニ～ヲ満たす」とよく似ている。「～ニ～ヲ詰める」が、人によっては～ヲ～デ形との交替を許すと判断される理由は、「容器に物が隙間なく存在するようになる」という、「～ニ～ヲ満たす」と似た位置変化を表すという点にあるのだろう。

しかし、「～ニ～ヲ詰める」と「～ニ～ヲ満たす」

す」には、次のような相違点がある。3.1.で述べたように、「A ニ B ヲ満たす」の表す位置変化は「形状適応」であり、B は必ず A の形状に適応しながら A の中に位置づけられることになる。そのため、B の部分に液体等を指す名詞を取りやすく、「石」などの固体を指す名詞をとる場合には複数の固体の集合として解釈されるのであった (3.1.の(7)を参照)。

これに対し「～ニ～ヲ詰める」の表す位置変化は、必ず形状適応を伴うということではないようである。森田(1989, p.743-744)は、「A に B を詰める」の B が単数の固体であってもよいこと、そしてその場合には A との大きさのかね合いがぎりぎり、A に B を入れるといっぱいになるという意味になることを述べ、次のような例を挙げている。

- (12) 木箱に壊れないよう気をつけて石膏細工を詰める (森田 1989, p.744)
- (13) 運搬は木ワクを造って、そこに慎重に仏像を詰めるのです (同)

上記(12)や(13)では、石膏細工や仏像が木箱や木ワクに合わせて形状適応するという解釈にはならず、詰める前後で石膏細工や仏像の形状は変わらない。次の(14)も同様である。

- (14) (川野補：飯碗の配送について) 一客ずつ化粧箱に詰めてお届けいたします。

(インターネット上の用例)

閲覧日 2012年12月28日。

<http://www.densakugama.com/pack.php>

これら(12)～(14)の「詰める」を「満たす」に置き換えるのは難しいであろう。「木箱に石膏細工を満たす」「木ワクを造ってそこに仏像を満たす」「化粧箱に飯碗を満たす」はいずれも不自

然に感じられる(「石像細工」「仏像」「飯碗」が複数であれば解釈可能かもしれないが、その場合は「形状適応」が読み込めるからである)。

以上のように「～ニ～ヲ詰める」は「容器に物が隙間なく存在するようになる」ことを表す点で「～ニ～ヲ満たす」に近い意味を持つものの、物の容器への形状適応を要求するわけではないという点が「満たす」等の交替動詞とは異なっている。よってその分、～ヲ～デ形への交替が難しくなるのだと考えられる。

4. 「覆う」の分析

4.1. 「覆う」に関する現象の確認

1節で述べたように、「覆う」も交替動詞なのか非交替動詞なのか、分類に迷う動詞である。

「詰める」の場合とは逆に、～ヲ～デ形は問題なく許容されるが、～ニ～ヲ形の許容度は人によって分かれるようである。

- (15)a. 自転車をシートで覆う
b. ?自転車のシートを覆う

3節でも言及した奥津(1981)、岸本(2001)(2011)、Iwata(2008)を見てみると、いずれの研究でも「覆う」は交替動詞のリストに挙げられていない。一方、山西(2007)は「覆う」について、～ヲ～デ形での使用が主流であるとした上で、次のような～ニ～ヲ形の使用例も報告している^{註11}。

- (16) 患部をそっと拭き、交換用の布を覆って絆創膏で留めた。(井伏鱒二『黒い雨』)
(山西 2007, p.8 (39))

石井(1981)は、「覆う」の文型として～ヲ～デ形だけでなく～ニ～ヲ形も挙げているが、～ニ

～ヲ形については、「あまり一般的ではなさそうである(p.2)」「判定に関しては、個人差がある(p.3)」と述べている。田村(1980)のように～ニ～ヲ形を「覆う」の文型に挙げていない研究もある。

これらの先行研究の記述を総合すると、「～ニ～ヲ覆う」は完全に非文とは言い切れないものの許容度は低く、少なくとも典型的な用法とはいえない、ということになる。

本稿が行った用例調査の結果からも、同じような状況がうかがえた。BCCWJ を用いて 3.2.と同じ方法で調査したところ、無作為に抽出した「覆う」の用例 500 例のうち、～ヲ～デ形と判断できる例が 105 例あったのに対し、～ニ～ヲ形と判断できる例は 1 例であった。以下に～ニ～ヲ形の 1 例を挙げる^{注12}。

- (17)……平素村人が全く通らぬ村道の奥深くには、幌をかけた大型トラックが乗り入れてあり、幌には海軍の錨のマークと「横建」と書かれた文字が見えた。ところが、その文字は実は布を覆って見えないようにしてあったので海軍は姑息なことをするものだと思ったというのであった。^{注13}
(岡本喬『海軍厚木航空基地』1987年)

4.2. 考察

以上のように「覆う」は、非交替動詞とはいえないものの、「満たす」等に比べると交替が難しい(～ニ～ヲ形が許容されにくい)といえる。以下でこの理由を考察する。

2 節で述べたように、状態変化を表す動詞(～ヲ～デ形をとる動詞)の中にも、「満たす」のように～ニ～ヲ形との交替を起こす動詞もあれば、「ふくらます」のように～ニ～ヲ形との交替を起こさない動詞もある^{注14}。

- (18)a. グラスを水で満たす
b. グラスに水を満たす
(19)a. 風船を空気でふくらます
b. *風船に空気をふくらます

このことは、一口に状態変化といってもタイプがあり、そのタイプによって、交替の可否(～ニ～ヲ形との交替を起こすかどうか)が決まることを示している。

川野(2009)では、交替動詞の表す状態変化は「総体変化」であり、非交替動詞の表す状態変化は「自体変化」である、と論じた。「自体変化」が、対象そのものに生じる変化(対象の属性の変化)であるのに対し、「総体変化」は「対象が他の事物を伴った状態になる」という変化であり、対象それ自体の変化を含まないものである。たとえば「～ヲ～デふくらます(非交替動詞)」の場合は、必ずヲ格句の事物が大きくなる必要があるのに対し、「～ヲ～デ満たす(交替動詞)」の場合は、ヲ格句の事物の大きさが変化する必要はなく、大きさ以外の属性(色や形や固さなど)が変化する必要もない。「満たす」以外の交替動詞(「壁をペンキで塗る」「腕を包帯で巻く」等)についても同じことがいえる。

このような観点から「覆う」について見てみると、「～ヲ～デ覆う」の表す状態変化は交替動詞と同じく、「総体変化」であるといえる。たとえば「自転車をシートで覆う」が表すのは、「自転車がシートを伴った状態になる」という変化であり、覆う前と後とで自転車の大きさや形等が変わるわけではない。「覆う」が、人によっては～ニ～ヲ形との交替を許すと判断される理由は、「総体変化」を表すという交替動詞の条件をクリアしているからであろう。

しかしそれにもかかわらず、「覆う」は、「満たす」「塗る」「巻く」等に比べると交替を起こしにくい。これには、次のような理由があると

考えられる。

「～ヲ～デ覆う」は、「ヲ格句の事物（例：自転車）がその外側にデ格句の事物（例：シート）を伴った状態になる」という形で総体変化が起こることを表す。このような意味的特徴を持つ「覆う」を～ニ～ヲ形、すなわち位置変化にシフトしようとする、どうなるであろうか。～ヲ～デ形のヲ格句とデ格句は、それぞれ～ニ～ヲ形ではニ格句（着点）とヲ格句（位置変化対象）になる。したがって「覆う」は、「着点に当たる事物の外側に位置変化対象が存在するようになる」という、位置変化における着点と対象の関係としては不自然な関係を指定してしまうことになる。そのため位置変化へのシフトが難しくなり、交替が成立しにくくなるのだと考えられる。

念のために、典型的な交替動詞についても確認しておく、「覆う」のような意味的特徴を持つ動詞は見られない。たとえば「～ヲ～デ満たす」の表す総体変化は「ヲ格句の事物（例：グラス）がその内側にデ格句の事物（例：水）を伴った状態になる」というものである。これを位置変化にシフトさせると「着点に当たる事物の内側に位置変化対象が存在するようになる」という自然な関係を得ることができる。よってこの場合、～ニ～ヲ形への交替を妨げる要素は存在しないといえる。

また「～ヲ～デ塗る」は、「ヲ格句の事物（例：壁）がその表面にデ格句の事物（例：ペンキ）を伴った状態になる」という総体変化を表す。これを位置変化にシフトさせると「着点に当たる事物の表面に位置変化対象が存在するようになる」ということになり、やはり、自然な関係を得ることができる^{注15}。

以上のように、「覆う」は「総体変化」を表すという点で交替動詞の条件を満たしているものの、一方で位置変化へのシフトを阻害する意味

的特徴も有しており、したがってその分、交替が難しくなるのだと考えられる。

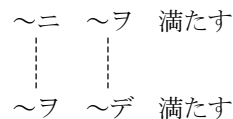
4.3. 餅くるみ交替に関する検討

ここまで「覆う」が壁塗り代換を起こしにくい理由について考察してきた。しかし実は、～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形の交替にはもう一つ、「餅くるみ交替」という、壁塗り代換とは異なるパターンの交替が存在する（川野 2004, 2006, 2009）。そこで、この4.3.では、餅くるみ交替と「覆う」との関係について考察を行いたい。

まず、「壁塗り代換」と「餅くるみ交替」の違いを以下に示す。

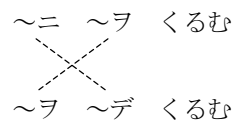
(20) 壁塗り代換

- a. グラスに水を満たす
- b. グラスを水で満たす



(21) 餅くるみ交替

- a. 桜の葉に餅をくるむ
- b. 餅を桜の葉でくるむ



壁塗り代換と餅くるみ交替の違いは、対応する格成分の組み合わせにある。壁塗り代換では、(20)に破線で示したように、～ニ～ヲ形のニ格句と～ヲ～デ形のヲ格句が対応し、～ニ～ヲ形のヲ格句と～ヲ～デ形のデ格句が対応するという形で交替が起こる。これに対し餅くるみ交替では、(21)のように、～ニ～ヲ形のニ格句と～

ヲ～デ形のデ格句が対応し、～ニ～ヲ形のヲ格句と～ヲ～デ形のヲ格句が対応するという形で交替が起こるのである。どちらのパターンで交替が起こるかは動詞によって異なっており、「満たす」「塗る」等では壁塗り代換のパターンになるのに対し、「くるむ」「包む」等では餅くるみ交替のパターンになる。なお、～ニ～ヲ形が位置変化の中でも「依存的転位」を表し、～ヲ～デ形が状態変化の中でも「総体変化」を表すという点は、壁塗り代換の動詞も餅くるみ交替の動詞も同じである。

先の4.2.では、「覆う」が「総体変化」を表すという交替動詞の条件はクリアしているものの、位置変化へのシフトを阻害する意味的特徴も有しており、そのために壁塗り代換の成立が難しくなるということを見たが、餅くるみ交替についてはどうであろうか。

まず現象から確認すると、「～ヲ～デ覆う」を、次の(22)のように餅くるみ交替のパターンで～ニ～ヲ形に交替させてみても、やはり不自然であり、餅くるみ交替は成立しないといえる^{注16}。

- (22) a. 自転車をシートで覆う
b. *シートに自転車を覆う

しかしその理由は、壁塗り代換の場合とは異なると考えられる。4.2.で述べたように、「～ヲ～デ覆う」は「ヲ格句の事物がその外側にデ格句の事物を伴った状態になる」という総体変化を表す。餅くるみ交替の場合、～ヲ～デ形のヲ格句とデ格句はそれぞれ、～ニ～ヲ形のヲ格句(位置変化対象)とニ格句(着点)に対応するため、このような総体変化を表す「～ヲ～デ覆う」を位置変化にシフトさせると、「着点に当たる事物の内側に位置変化対象に当たる事物が存在するようになる」となり、自然な関係が得られる。つまり「～ヲ～デ覆う」が表す「ヲ格句の事物

がその外側にデ格句の事物を伴った状態になる」という総体変化は、餅くるみ交替の成立を妨げる要因にはならないのである。実際、餅くるみ交替を起こす動詞にはいずれも、「覆う」と同じ意味的特徴がみられる(たとえば「～ヲ～デくるむ」は「ヲ格句の事物がその外側にデ格句の事物を伴った状態になる」という総体変化を表す)。

以上のことから「覆う」が餅くるみ交替を起こさない理由は別にあることになるが、それは「～ヲ～デ覆う」が、「デ格句の事物がヲ格句の事物の方に向かって動かされる」という動きの方向を指定する点だと考えられる。「自転車シートで覆う」といった場合、シートを自転車の方に動かすのであり、その逆の動作にはならないと思われる(「自転車」よりも移動のしやすいものをヲ格句にした場合も同様である。たとえば「皿をフキンで覆う」といった場合も、フキンを皿の方に動かすのが一般的であろう)。このような動きの方向を指定する「覆う」を～ニ～ヲ形、すなわち位置変化にシフトさせると、どうなるであろうか。先に述べたように、餅くるみ交替の場合、～ヲ～デ形のヲ格句とデ格句は、～ニ～ヲ形ではそれぞれヲ格句(位置変化対象)とニ格句(着点)になる。したがって「～ヲ～デ覆う」を～ニ～ヲ形(位置変化)にシフトしようとする、「着点に当たる事物が位置変化対象に当たる事物の方に移動する」という、位置変化動詞としては不自然な方向を指定してしまうことになる。このことが、「覆う」における餅くるみ交替の成立を妨げているのだと考えられる。

念のために餅くるみ交替を起こす「くるむ」や「包む」等の動詞についても確認しておくと、これらは「覆う」のような指定を持たず、動きの方向に関して無指定である。たとえば「皿をフキンでくるむ」と言った場合、フキン

を皿の方に運んでくるんでもよいし、フキンの上に皿を移動させてくるんでもよい。したがってこれらの動詞は、「覆う」のような、～ニ～ヲ形への交替を阻害する要因を持っていないことになる^{注17}。

5. まとめ

本稿では「詰める」と「覆う」を取り上げ、これらの動詞において格体制の交替が成立しにくくなる要因を、それぞれ考察した。結論をまとめると次のようになる。

「～ニ～ヲ詰める」は「容器に物が隙間なく存在するようになる」という位置変化を表す点で、交替動詞「～ニ～ヲ満たす」と似ている。～ヲ～デ形との交替が人によっては許容される理由は、この点にあると考えられる。しかし、「満たす」の表す位置変化が必ず物の容器への形状適応を伴うのに対し、「詰める」の場合はそうではない。つまり「詰める」は厳密には、「形状適応などの依存的転位を表す」という交替動詞の条件を満たしていないのであり、そのため「満たす」等に比べると、～ヲ～デ形との交替が難しくなるのだと考えられる。

次に「覆う」についてまとめる。「～ヲ～デ覆う」は、「総体変化」を表すという交替動詞の条件をクリアしている。～ニ～ヲ形との交替が人によっては許容されるのは、そのためだと考えられる。しかし一方で「覆う」は、「ヲ格句の事物がその外側にデ格句の事物を伴った状態になることを表す」「デ格句の事物がヲ格句の事物の方に動かされるという動きの方向を指定する」という、位置変化へのシフトを阻害する意味的特徴も有しており、そのために～ニ～ヲ形との交替が難しくなると考えられる。

川野(2009)では交替動詞の特徴を分析し、交替動詞の表す位置変化と状態変化が、それぞれ

「依存的転位」と「総体変化」として特徴づけられることを述べた(形状適応は依存的転位の一つである)。本稿で取り上げた「詰める」と「覆う」についても、川野(2009)の記述に沿った説明が可能であることが示せたと思う。

注

注1 (5b)に付した「?」の記号は、「人によって許容度が分かれる」「用例調査をするとこのような例も皆無ではないが、数が少ない」という状況を示すものとして用いている。(6b)についても同様である。

注2 「覆う」については川野(2009)の注10と注13でも簡単に触れたが、本稿では新たに行った用例調査の結果等も踏まえて詳しく論じる。

注3 なお、用語は研究者によって異なり、奥田(1968)(1976)では「とりつけ」と「もようがえ」、奥津(1981)では「移動」と「変化」という用語が用いられている。近年の研究では「位置変化」と「状態変化」が一般的であるので、本稿でもこれを用いる。

注4 「巻く」の例文を以下に示す。なお「満たす」と「塗る」については本文冒頭の(1)と(2)を参照。

(i)a. 腕に包帯を巻く(～ニ～ヲ形)

b. 腕を包帯で巻く(～ヲ～デ形)

注5 自動詞「詰まる」には、「容器等に物が隙間なく入っている」という意味の他に、「通路がふさがれて通じなくなる」という意味がある。奥津(1981)の挙げている「パイプにゴミがつまる／パイプがゴミでつまる」は、この後者の意味の「詰まる」である。一方、他動詞「詰める」は、この後者の意味ではあまり使われず、「詰まる」の使役形「詰まらせる」を用いるのが一般的だと思われる(パイプにゴミを詰まらせる／パイプをゴミで詰まらせる)。

注6 Iwata(2008, p.184)の当該箇所を以下に引用する。

Judgements are not always clear-cut, but informants find the *de* variants acceptable to the extent that they can imagine the box etc. as being occupied to the full.

注7 調査方法の詳細は以下の通りである。『中納言』の短単位検索で語彙素読み「ツメル」・品詞「動詞」を条件として検索したところ、2097例がヒットした。検索結果をダウンロードし、Excelでランダムに並べ替えた上で上位500例を対象に～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形の用例を数えた。ニ格句やデ格句が現れていない場合でも、文脈から格体制が判別できるものについては、～ニ～ヲ形、～ヲ～デ形の用例として集計

している。なお、受動文は今回の調査対象から外している。また、本稿の本文では「詰める」のように表記しているが、調査にあたっては漢字・仮名の別なく調査している。後述する「満たす」「入れる」「覆う」「ふくらます」についても同じ方針で調査を行った。

注 8 今回無作為に抽出した 500 例の中には入っていなかったものの、国立国語研究所『NINJAL-LWP for BCCWJ』(以下、NLB)による BCCWJ の検索では以下のような「～ヲ～デ詰める」の用例が 1 例見られたので、参考として挙げておく。

(i) 韓国では昔は嫁ぐ日、花嫁に目にハチミツをつけ、綿で耳を詰め、口にはナツメの種を含ませた。三猿になってほしいとの願いからだった。(曹喜澈『現代韓国を知るキーワード 77』、2002 年)

注 9 この(11)の例については、筆者の内省では「のどをつまらせる」の方が自然である。

注 10 なお、「入れる」についても同じ条件で用例調査を行ったところ、無作為に抽出した 500 例のうち～ニ～ヲ形が 287 例、～ヲ～デ形が 0 例であった。

注 11 山西(2007)は『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』の 38 名の作家の作品を対象に、「おおう(覆/掩/被/蓋/蔽の各漢字表記を含む)」の用例を調査している。採集された全 338 例のうち、主流をなすのは「(～で)～をおおう」の形(本稿における～ヲ～デ形)であり、～ニ～ヲ形での使用は本稿の本文に挙げた(16)を含む 5 例のみとのことである。

注 12 今回無作為に抽出した 500 例の中には入っていなかったものの、NLB による検索では以下のような「～ニ～ヲ覆う」の用例が 3 例見られたので、参考として挙げておく。

(i) 敷布団は藁布団をいちばん下に敷き、つぎに毛の布団を二枚敷き、上に白晒の布を覆っている。その厚みは三枚で一尺五寸もある。

(津本陽『椿と花水木』、1994 年)

(ii) 最近のものは耳を包む、ビニールのような物がついていますので。もし付いていないようだったら、ラップを耳に覆った方が、いいと思います。また、液が付きそうな、耳、顔、首は必ずハンドクリームをつけて保護してください。(Yahoo! 知恵袋、2005 年)

(iii) あとは首部分にスカーフやマフラーとかおおってあげるとあたたまり痛みが緩和されましたよ。(Yahoo! 知恵袋、2005 年)

注 13 (17)には二格句は現れていないが、ヲ格句の事物「布」の位置変化を表すと解釈できるため、～ニ～ヲ形の用例とした(集計の方針については注 7 を参

照)。このような例を入れても「～ニ～ヲ覆う」の用例は 1 例であり、少ないことが分かる。

注 14 「ふくらます」についても「満たす」や「覆う」等と同じ条件で用例調査を行ったところ、86 例がヒットした。このうち、デ格句が共起しており明確に～ヲ～デ形とわかる例が 1 例あり、デ格句は現れていないもののヲ格句の事物の状態変化を表すと解釈できる例 37 例を合わせると 38 例が得られた(後述するように、「ふくらます」は状態変化の中でも「自体変化」を表し、ヲ格句の事物それ自体の内的変化を表す。そのためデ格句の現れていない用例が多くなったと考えられる。このことについては川野(2009, p.54)も参照)。これに対し、～ニ～ヲ形と判断できる例は 0 例であった(着点二格句が共起している例はなく、また、ヲ格句の事物の位置変化を表すと解釈できる例も見られなかった)。

注 15 「～ヲ～デ巻く(交替動詞)」は「ヲ格句の事物がその表面にデ格句の事物を伴った状態になる」という解釈と「ヲ格句の事物がその外側にデ格句の事物を伴った状態になる」という解釈を持ち、そのために、壁塗り代換と餅くるみ交替(4.3.で後述)の両方の交替を起こすという珍しい振る舞いを見せる。このことについては川野(2011)を参照のこと。

注 16 なお、柴田(1979, p.214)では、餅くるみ交替の～ニ～ヲ形に相当する、次のような例が報告されている。

(i) 新治はうけとつた手紙を、昼休みに雨合羽におほうて読んだ。(三島由紀夫『潮騒』)

(ii) 君江は川島の返事を聞く間もなく袂に顔を蔽ひながら立上がった。

(永井荷風『つゆのあとさき』)

ただし柴田(1979, p.215)はこれらの例について、「文語的な用法のようで、現代の口語としては使えない」と述べている。また、前述した山西(2007)や石井(1981)、田村(1980)でもこのような「おおう」の用法は挙げられておらず、本稿が調査した用例 500 例の中にも見られなかった。よって少なくとも現代においては一般的な用法とは言えないと思われる。

注 17 なお、壁塗り代換を起こす動詞について述べる、動きの方向に関して無指定であるか、「デ格句の事物がヲ格句の事物の方に動かされる」という指定を持つかのいずれかである。「～ヲ～デ満たす」は無指定であり(たとえば「グラスを水で満たす」と言った場合、水をグラスに注いでグラスを満たしてもよいし、水瓶の水の中にグラスを入れることでグラスを満たしてもよい)、無指定の場合は～ニ～ヲ形への交

替を阻害する要因にはならない。また「～ヲ～デ塗る」は「デ格句の事物（例：ペンキ）がヲ格句の事物（例：壁、机、板きれ）の方に動かされる」という方向を指定するが、この場合も、壁塗り代換のパターンで位置変化にシフトさせると「位置変化対象に当たる事物（元のデ格句）が着点に当たる事物（元のヲ格句）の方に動かされる」という自然な関係が得られるので、壁塗り代換を阻害する要因にはならない。

引用文献

- 石井龍治(1981)「特集・類義語の意味論的研究 つつむ・おおう」『日本語研究』4, 東京都立大学
- 奥田靖雄(1968)「日本語文法・連語論 を格の名詞と動詞のくみあわせ(一)」『教育国語』12, 麥書房
- 奥田靖雄(1976)「言語の単位としての連語」『教育国語』45, 麥書房
- 奥津敬一郎(1981)「移動変化動詞文—いわゆる spray paint hypallage について—」『国語学』127, 国語学会
- 川野靖子(2004)「桜の葉に餅をくるむ」と「餅を桜の葉でくるむ」—壁塗り代換との関連性—『香椎潟』50, 福岡女子大学国文学会
- 川野靖子(2006)「現代日本語における位置変化構文と状態変化構文の交替現象—格成分の対応の仕方—」『日本語の研究』2-1 (『国語学』通巻224), 日本語学会
- 川野靖子(2009)「壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞—交替の可否を決定する意味階層の存在—」『日本語の研究』5-4 (『国語学』通巻239), 日本語学会
- 川野靖子(2011)「壁塗り代換と餅くるみ交替の両方が可能な動詞—「巻く」と「埋める」の分析—」『文藝と思想』75, 福岡女子大学文学部紀要
- 岸本秀樹(2001)「壁塗り構文」影山太郎(編)『日英対照動詞の意味と構文』大修館書店
- 岸本秀樹(2011)「壁塗り構文と視点の転換」影山太郎・沈力(編)『日中理論言語学の新展望 1 統語構造』くろしお出版
- 柴田武(1979)「オオウ・カプセル」『ことばの意味 2 辞書に書いてないこと』平凡社
- 田村公男(1980)「特集・類義語の意味論的研究 おおう・かぶせる」『日本語研究』3, 東京都立大学
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- 山西正子(2007)「動詞「おおう」と格助詞」『目白大学 文学・言語学研究』3
- Iwata, Seiji. 2008. *Locative Alternation: A Lexical-Constructional Approach*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

付記

本研究は JSPS 科研費 23720231 の助成を受けたものである。